

三河アララギ

2021年2月 如月 きさらぎ

二 月 号

第 六 十 八 卷 第 二 号

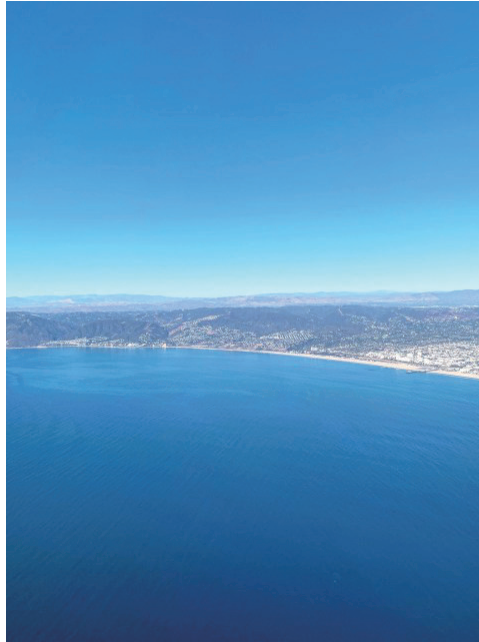


ニューヨーク日記(172) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

ESCAPE TO JAPAN

Blue Shoe Diaries



んーコロナで一番旅行するなと言う時に羣衆にも飛行機乗って日本に飛んじゃいますと言うか逃げます。なのでしばらく東京のアパートを借りて14日間の検疫の後、年末年始はお母さんと過ごせるように早速お節とか頼んで今年にしては普通の年末年始が過ごせそうです。日本でも自粛生活になるので何処にいても変わらないと思うけど食生活はやっぱり楽しみだな。ちょうど自炊にも飽き飽きしていたところだしと贅沢な文句言ってます。

Rolling my eyes at myself. I am flying, escaping really, to Japan right when you're asked to stay put and not travel because of the pandemic... Since I'm traveling anyway, I'll be quarantining and social distancing in Japan for a while. Where there is a lot less Corona than in the US where it's just nuts. Then if all goes well, I'll get to spend New Year's with mom!

目次

第六十八卷第二号(通巻八〇六号)

表紙・福寿草	今泉 由利 (1)	吉見 幸子 (24)	浜田 紀政 (33)
ニューヨーク日記(172)	Blue Shoe (2)	牧原 正枝 (24)	植村 公女 (34)
アカンサスの徑	御津 磯夫 (4)	森 厚子 (25)	岩崎あつ子 (35)
かぜくさ	大須賀寿恵 (5)	山崎 俊子 (25)	木村 歩歩 (34)
歌集「續々草々」	今泉 米子 (6)	三田美奈子 (25)	今泉 如雲 (34)
はゞきくさ	岩瀬すゞへ (7)	水野 絹子 (25)	今泉 由利 (35)
志賀山寺萩	岡本八千代 (8)	現代学生百人一首	かきね吟行会
クリスマス イブ	弓谷 久子 (10)	東洋大学	『酔いの徒然』(106)
赤道を	今泉 由利 (12)	佐藤 響 (26)	楽しい時間(99)
「もったいない」	安藤 和代 (14)	小松原万愛 (26)	絹の話(123)
手を振る	清澤 範子 (15)	北森 葵 (26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
寒梅の	伊藤 忠男 (16)	椎野 有紗 (26)	「江上浩二の独り言」
科学と俳句	矢崎 直人 (17)	正能雅玖斗 (27)	漢詩研修(五十二)
木瓜の実	森岡 陽子 (18)	伊藤あるは (27)	『責任について』
姫街道	白井 信昭 (19)	横山 花梨 (27)	故郷に遊んで俳聖を思う
富士日記	杉浦恵美子 (20)	田中 万葉 (27)	花辨酒
あるがまま	山口千恵子 (21)	森岡 陽子 (28)	芭蕉と子規5
家族	阿部 淑子 (22)	高橋 育郎 (30)	「氷魚」のことから(24)
静寂	夏目 勝弘 (23)	山元 正規 (32)	岡本八千代 (57)
『いとよせ』	いーはとぶ	重野 善恵 (32)	編集室だより(二〇二〇年十二月)
		田中 清秀 (32)	今泉 由利 (58)
		森岡 陽子 (33)	野菜・果物・まんだら(36)
		鈴木美耶子 (24)	「三河アララギ」について
			(60)

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

やまひより癒えゆくわれは暈にさす春のまひるの光をぞ浴む

春の雲ながれゆきつつ高々と鳶飛びめぐる引馬野の天^{てん}

片栗になるべき萌えのまだ一葉しばし稚きくれなるあはれ

朝々に雪も氷も霜さへも見ず聞かずわが癒えてゆく春

春の雲かがやき白く松の間を遠ざかりつつ片寄りゆきぬ

阿礼之崎引馬野の空をとびめぐる鳶はわが庭の土にくだらす

はしばみの黄の房花の垂り花をゆりしひたぐる光と風と

ひるまへのわが二時間の外来につどへるは静脈ほそき女ら

植えすてて見ざりし去年の鉢の土にたねつけばなの早き花立ち

長病みのあひだに枯れし若楓枯れたるままの葉をまだ保つ

かぜくさ

大須賀寿恵

指名さるを待ちゐる大会々場にわれの唇乾ききりたり

ペンを持つ吾が手のふるへとどまらず私情を入れし討論の中

洗剤を泡立てて洗ふ子を見れば処女さびたるしぐさを見する

もちひ焼きし吾手の匂ひいつまでも床の中にて匂ひてゐたり

くらみ来し庭に向ひてゐし人のかはたれどきと一言いひき

人といふ心の今日の事務室に退職願の代筆をする

めざめしはあかときならむしわがれし鴉のこえのしばらくきこゆ

さまざまに思ひうつりて覚めてゐる部屋の障子に朝の陽の射す

くちなしの枝垂るる下に漂ひてほてい葵は冬を越えたり

退職願のコピーとりゆく五枚目にともに学びし友のがありぬ

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

はつはつに萌えて来るらし五十年植え捨てて砌のわが福寿草

太郎庵椿とおもふ白椿遙けくなりぬそのかの人

みづからの散葉包みてゐたりけり吹雪降りしく外来時間

マッキンリーの雪洞に手を振り応へしと心痛し植村直己氏

何か忘れし思ひしてゐる夕まぐれ青く錆たる風鈴の鳴る

フェンス越えて道より見ゆる奥庭の冬枯れ立てる芭蕉十五六本

長かりしごとき一日と思はれて斑雪解けつつ霽だつ夕べ

悄には白玉椿の今日の花運命のごとく雨荒れにけり

雪雲の切れて明るき畳の上黒き紬の着物をたたむ

風花の舞ふ朝見たり紫のつばみの見ゆるホトケの座なり

はくきくさ

岩瀬 ずゝへ

六人の子を一人に育てつつ雑貨商ひしわが十五年

自転車に雑貨をつみて売りに行く梅雨の晴れたる朝風すがし

御津浜の砂をバケツに掬ひ来て浜木綿の種子一つ植ゑたり

三谷に行き牧山に行き保険募集まとまらず日傘忘れて帰る

十七度廻りきたりし八月七日豊川工廠戦没者像の前に額づく

黒煙天を覆ひし豊川工廠に靖光はその防空壕の中に死にたり

帰り来らぬ吾子を待ちつつ道わきに立ちつくししが夜は明けにけり

台風の後のなら続く雨降りに蒲団縫ひ居り眼鏡曇りて

三度来て幾柄も見せやうやく売る好み分からぬ初めての客に

真之の残して行きし鳩一羽巣箱にこもり朝夕に鳴く

志賀山寺萩

蒲郡 岡本八千代

御津先生ご夫妻下されし志賀山の寺萩今年もゆれてゐるかな

志賀山の寺萩今年も黄金色こがねいろになびきゆれつつ冬となりつつ

寺の名は崇福寺と言ふこよりは京都白川に出づる道すぢ

知らぬ間にわが庭にさえ萩の花咲きて散りたり去年こぞの如くに

「もの書きは盆も正月も無きもの」と思ひつつもはや今日も夕暮

「ママ」といふ近くの八百屋の大売出しわれも買ひたりチョコレート幾袋

廊下にも銀色の光り落ちてをりあはれみなわれの髪かみの抜け毛よ

今日もまた和服の寝巻のその上に作務衣を着たるそのままにして

作務衣のまままた一日の暮れゆきてけじめのつかぬ^{おの}己れを哀^{かな}しむ

「あいまいさに余情がある」とわが書きしメモが机の上にありたり

なるほど感じて読みたるわが書きしメモにも親しさの湧くごとくして

気がつけば今宵クリスマススイヴなれど何とも思はぬ私となりつつ

「氷魚」の稿ポストに入れて帰るなり晴れ晴れしたるこの嬉しさよ

今日もまた老ゆ人あはれコロナ禍に外出禁止の命令つづく

北杜夫も「分裂気質を持ちてゐる」とわれも安心して今宵も眠る

クリスマスイブ

豊川 弓谷 久子

一週間の過ぎゆく早しサンデー版のクロスワードを今朝も解きをり

丈高く長く咲き来しマラカスの倒れ伏しをり昨夜の風雨に

咲き残る花惜しみつつ倒れたるマラカスすべて刈り取りぬ

刈り取りしマラカス大きな束となり残りゐる実はカラカラ鳴りぬ

忘れ得ぬあの日の朝よ開戦の昭和十六年の十二月八日

今にして思えば空し勝つまでは欲しがりませんのあの合言葉

語り合ふ人も無くなりぬ戦争の中を過ぎにし青春時代

久びさに編機を出して子はセーターを編みているらし音の聞ゆる

分解し掃除し針を取り換えてミシンの調子ととのい来る

「平凡に生きる幸せ」との歌一首添えてしめ縄送り給えり

はやばやと大雪降りて北国の雪に埋れし景色のニュース

雪道に立往生の車の列もテレビはうつす心痛みぬ

トナカイもツリーもサンタも子の手編みショーウインドに並びてをりぬ

フライドチキンとケーキが子より届きたり今宵は我が家もクリスマスイブ

冬庭に残る雑草抜きとりぬゆく年送らむ心静かに

赤道を

東京 今泉 由利

英国へ船旅をせし祖父にして「皇太子白馬」連れ来しことを

塩風と太陽光と夜の星と赤道よぎりてアルゼンチンへ

「赤い線引いてない」と驚けり赤道海域通過してゆき

地球なるまろみの見ゆる水平線四十五日間眺めつづけて

狒犬がシーサーもゐるペンギンも権現山の頂上に住む

門松も仏壇も神棚も父母の位牌も心の内に仕舞いあり

見下ろせる景色の中へ入りゆくうとう坂を下りきたりぬ

自の心の内の神様へ八海山の雪どけ水の大吟醸

擦りおろす柚子皮を練り込めり柚子香りたつ柚子切り出来る

二八の蕎麦茹であぐる冷水に締め新しき年となりたり

箱根西麓標高五十mスズナ・スズシロ・セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ

米五勺七倍ほどの水に炊く芽吹き七草七草粥を

ほんのりと日本のお米の甘さにと懐かしきごといとほしきごと

ひとつだに同じ形は無きといふ無限に続く無限の結晶

あのこともこのこともまた甦よみがえる私一世のあのことこのこと

「もったいない」

豊川 安藤 和代

鮮やかなまわしで入場力士等の千秋楽よ空青く澄む

温室の電照菊に灯のともり事なく村の暮るる冬の日

北風にのりて元気な児等の声いよいよ冬も深まりてゆく

若き日に父と開墾せし畑はバイパスとなり車連なる

花殻を摘む吾をまね幼子は咲きいる花を摘みてほほ笑む

「もったいない」孫の捨てたる白紙に歌など書いて吾れの満足

八宝菜の海老が小さい大きいと幼の様に孫は賑やか

庭の菊嫁に供へば嬉しげな顔の浮びて十二年過ぐ

冷え増せば五十過ぎたる子を案ず八十吾れは孫に笑わる

手になじむペンのインクのかすれるを赤児だます如一首を記す

娘のくれしブーツで師走の街ゆけば足はポカポカ心ホカホカ

手を振る

春日井 清澤 範子

夫はまた心不全にて入院す食事療法にて冷たい風の吹く日に

コロナ禍で面会出来ずただ遠くから手を振る君に会える一瞬

献立表にある玉ねぎ刻めば塩分は○にてことと柔らかく煮る^{ゼロ}

一日を通して一五〇〇カロリーにおさえること吾きもにやきつく

アララギを読む時間もしばしの間気がつけば早や五時をまわれり

胡瓜とわかめの三杯酢少し甘みをつけて一品

吾は整形にかかる身でありながら夫と娘の食事に悩む

タリージェと言う名の薬飲み居ても腰から足へ痛みは走る

吾が腰痛と十年も診て下されし前田先生徳洲会病院徳島へ帰ります

梅干の８％の塩分もとれなき夫心淋しも

吾が家の庭に植えある貝塚伊吹なり高々伸びて剪定を待つ

寒梅の

大阪 伊藤 忠 男

滝水はギアナ台地に降る雨と不思議な世界WEBならこそ

年の瀬も私設寺子屋休み無く白板ボードに数式並ぶ

サイコロを切断した後形何孫に教える手作り模型

寒梅の里に吹く風冬嵐耐えるつばみに類近づける

流行り後の孤立主義から悲劇へと転がり落ちた過去を忘れじ

忌まわしき過去のあの過去学べるかコロナ後にくる一つの世界

人と人大地踏みしめ支え合うこれぞ人なり人救う道

フェイクとて耳をすませば真実が見えるものだと言ひ聞かすなり

花つばみ膨らみ初め喜びもひとしおなりや初春の夢

看護師の笑顔見る時いつなるや今日も最多を超える報道

木漏れ日の中を踏みしめ熊野路を歩む心は無のままなりや

科学と俳句

東京 矢崎直人

冬晴れの更地の向こう庭の見え枝ぶりの良き梅か桜か

寒晴れや頑張れやにも聴こえきて季語に励まし見つけて嬉し

散歩の歩はやくなりぬる季節なり小さくはやく小さくはやく

大塚台公園先の都電沿い薔薇ロードなる道を見つけし

スマートフォン鞆に入れて歩いても歩数数える機能の鈍し

冬の空学び舎の声大きくてコロナ禍にても伸びゆく子らの

消防車一台二台走り行く大きな火事にならなきやいいが

レノンの忌有馬朗人の逝くを読み科学と俳句政治を思う

一週間頑張ってきた金曜日力を抜いてゆるゆる許す

一年の挨拶に来る誰もかも受けるこちらにもマスク外さず

木瓜の実

東京 森岡陽子

空澄みしメタセコイアの公園は落葉集めてハートの型に
コロナ禍で消毒剤を並びおく手指と衣服ドアノブ用なる
紅黄色染まりし木々は山里にひと風吹くや散り行く哀れ
冬日あび木瓜の実五粒木に残る落ちる事なくただ腐り行く
寒風に焼芋かをり買い求むしつかり抱へおなかポカポカ
窓辺より見なれし木々の葉の枯れて一時さびしく掃除ゆうつ
取り壊す団地のくずれた塀のすみ寒桜の花小さく小さく
梅の木の残る落葉を掃く日々に疲れ嘆くは蕾に気づかず
新年を迎へし開く赤手帳まだまだコロナ禍予定入らず

姫街道

豊川 白井 信昭

「現代漢和辞典」架台の上引かざりしまま十五年へぬ

故岡井隆「中日歌壇」の褒賞のわれ図書券にて買いしこの辞典

姫街道洋食チエーン店開きアサリパスタに心たらえり

少しずつ壁の補強はようやくに後一段に今年を終える

堤防にあがる坂道悉くマオウ刈られ見通しのきく

ユキヤナギモッコウバラの葉師走に入りて風に散らばふ

音羽川水門近く白サギの群浅瀬に立つ鮎^{あさ}を漁るか

本宮山頂一面雪化粧寒さ身にしむ寒気団南下

久方の御津山低くかかりたる冬の巨^{おお}いなる虹に真向ふ

入出口垣根の上にも紅バラの返り咲きおり師走も下旬

富士日記

蒲郡 杉浦恵美子

中秋の我が誕生日藍色の空今や古希母は越えざり

我が誕生立ち会ひし人今は唯叔母が残れり母のいもうと

命名の由来教へて呉れたるはこの叔母なりきほほえみことぞ

我が名付け一寸ドラマがあつたとてこの名背負つて生きてるわたし

富士日記朝昼晩の献立と食材記さる半世紀もの前の

ゆくりなく亡き叔父達を思ひ出づ学ラン姿や母の手料理

富士日記時には馬鈴薯だけの昼ご馳走よりも羨しき気がする

されど我は乗らぬ自転車物置に何時まで置いても錆びゆくばかり

あらこんな角度に五井山見えてゐる歳を取るのも悪くないかも

五井山を右手に捉へさて今から尾張に向かふ長距離運転

あるがまま

豊川 山口千恵子

あざやかな緑色したいもむしが秋の庭のろのろ動く

大がかりな通行止めしてわが露地に高き電柱立ててゆきたり

夕べ告ぐチャイム鳴れば台所に夕餉の支度せむと立ちたり

五時を告ぐメロディー外に鳴りわたる日暮れの早しはや師走なり

通りゆく道の側溝に鷺一羽われにおどろきばたととび立つ

降りそそぐ光の中に座りつつあたたかきかな太陽の光

あたたかき冬の日射しに開け放つ二階の窓にみる紅き山茶花の花

あざやかな銀杏黄葉散りはてであるがままなる冬木あらはる

一年の「三河アララギ」十二冊本棚にならべ揃へて立てる

にぎやかに花咲かせぬしわがダチュラ寒さにあたりみどり葉萎れる

幾十羽休耕田におり立ちてうごめく烏黒光りせり

家族

横浜 阿部 淑子

我が詠める拙き歌もアララギに載りたる見れば額の中

湯船より上がりて夫は意識なく呼べど応えず湧泉に灸

湧泉の灸効を奏してよみがえる脳の回転俄に低下す

出生の番地もすらすら言えし夫今は忘れたの言葉連続

浴槽を運び入れての入浴法ナノバブルに心地良き顔

目ざめるとこもり熱出しようとうと夫を氣遣い今日も暮れゆく

時を見て娘孫まで夫支え家族の愛に救われる我

はやぶさ2の採取したガスは地球上の大気成分とは異質と解り

静寂

豊川 夏目勝弘

闇に目覚め無心の時のしばしあり静寂といふは哀しかりけり
しんしんと雪降る夜は何故にいと静寂が深くなるのか
目覚めよりの静寂の時の短かかり左の耳の耳鳴りが始る
時どき夜中に目覚めること多し疲れるほどの仕事するなし
音の無き世界が静寂といふならず雑踏の中にも静寂がある
静寂と思ひし時に突然に過去のこもごも巡り始まる
我が狭庭に静寂の時間のいと多し小鳥の声も人も通らず
この秋は草の茂れる我が庭に虫の鳴き声を聞くことのなし
ミカン草の茂れる狭庭冬草の深き緑が静寂を破る
この冬はハキダメギクの小さき花それも霜にて枯れてしまひぬ
籠る日の多き暮しにテレビよりコロナに心乱ふるはなし
静寂とは物理的なものならず己が心の変化なりけり

『いっよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

突然の電話の声に懐かしく半世紀経て未だ変はらじ
何事もコロナ禍故に先伸ばし会ひたき気持押し込めてをり

牧原規恵

幾万の星の囲まれ輝ける今宵の名月夫と観てをり
衰へゆく母見詰むれば哀しけれ今宵の月も少し滲みて

稲吉友江

夕つ方インタフォン鳴り「洗濯物出てるよ」などと言ひくれるはや
持ち帰りのハンバーグ待つ店の隅マスクのままに下を向きゐて

鈴木美耶子

やうやくに会合三日続きたり懐かしきかなあの顔この声
朝霧のしっとりかかる庭隅にひそやかに咲くホトトギス一輪

吉見幸子

時雨きて生木に株に雨粒のはじくやうなりしみこむやうなり
切り株になりてしまひし生垣の五十余年の生木が香る

牧原正枝

玉響^{たまゆら}の雲の切れ間に日の差して光る海見ゆこの道の先
雨落ちて急ぎベダルを踏み込みて帰りたる家に虹の橋立つ

森 厚子

庭に出で手の届くまでと草をとる小春日和のひとしごとかな
たうたうと流るる水音身のうちに今も響けりかのほり川の

山 崎 俊 子

残照の薄くれなるに裾^{すそ}めゆくを仰ぎてをりぬ拌みたくなる
取って置きの紅茶を淹れてこの真昼イーハートーブ交響曲しみじみと聴く

三 田 美 奈 子

文字震へ揺れて乱れて切々とその一葉に溢るる憶ひよ
彼の人の忘れ得ぬ家も既に無く空き地の上を人の過ぎゆく

水 野 絹 子

現代学生百人一首

東洋大学

キヤツシユレス色々使つてみたけれど硬貨の重み忘れられない

福島県立平工業高等学校三年

佐藤

響

帰り道暮れ行く空にカメラ向け密かにためる夕焼け貯金

茨城高等学校二年

小松原万愛

「なぜうちを？」今日はこちらがきいてみるスーツの私と巣かける燕

筑波大学四年（茨城県）

北森

葵

一輪の向日葵みたいに生きていた祖父の姿に憧れ抱く

東洋大学附属牛久高等学校三年

椎野有紗

超不安大事な模試の解答欄続く文字列アエアエエエ

東洋大学附属牛久高等学校三年 正^{しょう}能^{のう}雅^が玖^く斗^と

私だけとり残されてゆくような東京帰りの電車の窓際

高崎商科大学附属高等学校三年 伊^い藤^{とう}あ^ある^るは^は

おとうとのつむじが見えなくなった日にひとには別れがあることを知る

埼玉県立川越女子高等学校一年 横^{よこ}山^{やま}花^{はな}梨^り

目の前で手と目で話す手話会話少し分かって静かに参加

埼玉県立川越総合高等学校二年 田^た中^{なか}万^{かず}葉^は

贈呈誌

森岡陽子

月虹 137号

○かすかなる風に花びら散り初めて哀れに八重なる花くづれたり

桜井範子

○椋鳥は椋鳥の群尾長らは尾長らの群柿の畑に

小林勝

○価値のなきものと伐られず捨て置かれひたすら生きき縄文杉は

清水和子

○酒好きの名残りのごとく家にいてバカラのグラスでのひらに愛ず

水上信子

○陽に焼けて色失ひしポスターに消防団員募ると男笑む

井村喬泉

○廃園に立つ柚の木の野生する過程か幹に葛のからまる

鮫島満

冬雷 2021年 1月号

○湖底に聚落の怨み沈みをり水張るダムの淀みは暗し

三木一徳

○わだつみの海に逝きにしはらからを偲べばいとし釜石沖に

岩渕綾子

○引く草の根元に残る空蟬は背中へこめど足踏ん張りをり

鈴木やよい

○しぐれとは淋しき言葉その雨の降りつづきたり今日のいちにち

古嶋せい子

○溝蕎麦の白き小粒の花の群拭ふが如くに小川さらさら

山本述子

○黒雲の間にみゆる白き雲赤く染まりぬ夕方四時半

伊澤直子

○三河線の高架工事は容赦なし母校の桜の古きを倒す

児玉孝子

○霧のなか古代の風にいざなはれ吉野ヶ里遺跡の囁きを聞く

吉岡松世

○直されし被爆ピアノが菩提寺に響く音聴きて平和かみしむ

水澤夕力子

「ナラシド♪」どんどん音頭

高橋育郎 作詞

一、ハアー バラが咲いたよ 「ナラシド♪」どん

水鳥飛んでる 「ナラシド♪」どん どん

習志野生まれの アイドルだ（ソレ）

みんなで踊ろう 輪になって

空は青いよ 風さやか みどり豊かな ふるさとの街

「ナラシド♪」どん ハーイよろしくね

二、ハアー シンボルマークは 音符だね

頭にアンテナ かわいいな

この街きょうも 奏てる（ソレ）

あしたもみんな 歌おうよ

音楽の街だよ 胸が鳴る 文化のかおり 明るい笑顔

「ナラシド♪」どん ハイしあわせに

三、 ハァー 翼パタパタ 大きな目

元気がいいね 頼もしい

みんなが大好き 「ナラシド♪」どん（ソレ）

拍手と歓声 湧きあがる

スポーツさかんだ 光る汗 輝く健康 未来を拓こう

「ナラシド♪」どん ハイどこまでも

『俳句』

滝涸れて一枚岩を迂る風

山元正規

軋ませて雨戸繰る日や初氷
川幅を使ひ切れざる冬の河

遠きほど紫紺の色に山眠る

重野善恵

一切を捨て冬の街路樹逞しく

母逝きて炬燵の消えて久しかり

枝先に揺るる残り葉冬芽立つ

田中清秀

生垣に朝餌求めて笹子鳴く

隠沼の光りとなりぬ薄氷

冬夕焼金具の光る黒リユック

森岡陽子

手をさすり居酒屋に入る年の暮

古暦最後の週の夢競馬

冬温しテトラポットの太公望

松本周二

冬木立男窮地に立つことも

ひとり居の柚子湯で歌ふ「叱られて」

ガス灯の誘ふ占ひ十二月

浜田紀政

しぐるるや箱根の森のピカソ館

冬至の日明かりの入る露店風呂

近道を探して廻る小六月

植村公女

先生のカバン重たき冬はじめ

さよならの握手の温みマスクかな

カレンダー張り替えられて部屋新た

岩崎あつ子

唯一つ残りしも落ち寒椿

初姿カラー写真に色豊か

赤膚と銘あるものや炉辺に置く

短冊に我が句を書きて書き始め

山茶花の緋毛氈かな石だたみ

木村歩歩

湘南も鉛色なり冬の海

白杖の柵たたき行く冬浅し

サックスの五拍子にひとり聖夜かな

露天湯に九九さらう子や十二月

今 泉 如 雲

津た輕め為の信ぶの攻めし城かな冬木の芽

冬帝や津輕こけしの胴に顔

ふうわりと雄蕊包むるお茶の花

今 泉 由 利

印度タイ中国伝ふ冬の寺

熱爛のつまみは海の白クラゲ

紀州産青石の上日向ぼこ

かさね吟行会

「横浜・野毛山公園」 12月

田中清秀

日だったが全員元気に散策を開始した。

開園当時の野毛山公園は、日本庭園と西洋庭園との折衷様式だったが、関東大震災や戦後の進駐軍に接収されるなど歴史を経て、日本庭園だったところは動物園に、西洋庭園は噴水と遊園地が変わっている。

安政六年（一六五八年）の日米修好通商条約に基づき

その翌年に開港され文明開化の拠点となった横浜、東側の山手地区には外国人居留地が、西側の野毛山は日本人の豪商の住宅地が割り振られた。三溪園で知られる原富太郎や野澤屋を開いた茂木惣兵衛などの邸宅が建てられた。また、明治二十年には横浜水道の貯水池がここに作られ、日本で初めての近代水道事業が始まった。その後、関東大震災で大きな被害をうけて大正十五年に防災の用地となり、市民の憩いの場としての「野毛山公園」が建設された。九・一ヘクタールの広い敷地を有し、展望台の標高は五〇メートルとやや低いが、横浜港やみなとみらい地区が一望できる。春はサクラの名所として、秋にはもみじや銀杏の紅葉が楽しめ、また、子供に人気の動物園も造られている。

令和二年十二月十一日、桜木町駅に集合、タクシーに乗り十分ほどで公園前に到着する。生憎、雲り空の寒い

小春日やG-1懐かし桜木町

紀政

海見ゆる丘の公園石路の花

正規

丘の上には江戸時代に開国論を説き、幕府に横浜の開港を進言した佐久間象山（しょうくざん）の顕彰碑がある。風雨に打たれ薄く掠れた文字は時代の流れを思わせる。また、案内書には中村汀女の句碑があるとのことだが、残念ながら見そびれた。「露のたうおもひおもひの夕汽笛」の句が刻まれている。汀女は夫の転勤で横浜に住み、良き時代の横浜をこよなく愛し幾多の名句を残している。

公園の散策路の脇に小さな池が有り、散り残る紅葉が鮮やかに水面に映り、鴨が群れ静かで安らぎのある風情を醸し出していた。池端には写真家が身じろぎせずにじっとシャッターチャンスを待っていた、この我慢強さ

にはいつも感心する。

散り際の紅葉また良し鴨の陣

善恵

小さき池小さきなりに鴨の陣

正規

スロープ式の歩道橋「野毛の釣り橋」を渡り動物園の散策へと進む。ここは横浜市の施設で入園料は無料、また、動物たちは生息環境にできるだけ近づけた状態で展示されており、野鳥や猿を始めキリン、ライオンなど飼育されていた。また、園内のなかよし広場ではハツカネズミやモルモットのふれあいイベントも実施している。行楽シーズンには多くの横浜市内外からの来園客で賑わうようだが、当日は冬場とコロナ禍の影響で人影はまばらで、限定的な展示となっているのは寂しかった。

枯葉積む古いライオンの狭き檻

清秀

体毛が手袋替り手長猿

陽子

句会は日ノ出町のファミレスで昼食を取りながら、いつものように囁目三句出し四句選で行い、野毛の歴史探訪と動物園の吟行は無事に終了した。

【番外編】

十二月は、高層ビルに囲まれたみなとみらいの夜景が美しく、特にクリスマスのイルミネーションは華やかに輝き素晴らしい。そこで夕闇が迫るまで待って、寒さに負けずコートの際を立てながらの散歩を追加した。



横浜みなとみらいの夜景

『酔いの徒然』（二〇六）

丸山 酔宵子

『ギムレットとジン・トニック』

「ギムレットにはまだ早すぎる！」はレイモンド・チャンドラー「ロング・グッバイ」長いお別れ」の主人公探偵フィリップ・マローウの決めセリフである。

「本当のギムレットはジンとローズ社のライム・ジュースを半分ずつ、他には何も入れないんだ」。

ギムレットの味、それは「神秘的な淡い緑色の中に仄かな甘さと鋭い強さ」。英語で錐（きり）の意で、鋭く突き刺さるような味が語源の一つと言われている。もう一つの起源とされているのが、19世紀末、イギリス海軍軍医ギムレット卿が、艦内で配給されていたジンの飲み過ぎを憂慮し、健康維持のためにライム・ジュースを混ぜて飲むことを提唱したこととも言われている。

その当時はライムがなかなか入手できず高価であったため、コーディアルライム（人工甘味付きライム・ジュー

ス）のローズ社のライム・ジュースが定番になっていた。しかし現在ではライムは手ごろに入手できるようになり絞ってライム・ジュースを作るようになっている。

ジンのもう一つの代表的カクテルは「ジン・トニック」。イギリスの植民地で、健康飲料として飲まれていたトニック・ウォーターにジンを入れてみたら驚くほど飲み口がよかったというのが始まりとのこと。トニック・ウォーターとは、炭酸水に各種の香草・柑橘類の果皮のエキスを糖分を加えて調製した炭酸飲料。従ってかなり甘目で、辛党としてはやや躊躇するところがある故、昨今ではソーダを足して甘さを抑えた『ジン・ソニック』なるものを飲んでいる。

新型コロナ禍、銀座も自粛、出張にかこつけた北新地や博多の屋台めぐりも儘ならず、自宅周辺の自由が丘あたりでひっそりと馴染みのバーで憂さを晴らしている。昨今これとは、何回か軽く訪れているオーセンティックバーがある。東横線都立大駅の側にあるこ洒落たこだわりのバーで、その名も「都立バー」である。

因みに、数十年前には目黒のこの地に都立大学は存在

し、その故の「都立大駅」であるが、いかなる行政上の変更があったかは不明だが、現在は首都大学という名になってこの地から出奔してしまった。しかし、東横線駅名は周辺住民の熱い要望で「都立大学」の名前が残されたのである。

「ジン・ソニックくれますか?」「はア・・・?うちのジン・トニック、甘さはありませんよ」といつて小洒落（こじゃれ）た瓶に入ったGeoというトニック・ウォーターをカウンターにおいて、「シークワサー果汁を使用した味は、ジン・トニックに深味が出るのです・・・」「・・・爽やか・・・美味（うま）い!」

マスク取りジントニックの泡はじく

酔宵子

楽しい時間 99

山本紀久雄

2020年12月31日

九代目市川團十郎・・・其の五

中村高志氏（山梨日日新聞文化部）が雑誌『演劇界』（1985・4月号）で、「團十郎と山梨」を寄稿している。

《初代市川團十郎の系譜を遡ると、甲州武田家に仕える武士・堀越十郎家宣という人物に行き当たる。諸説ある中で、甲州出身説を確定したのは、市川三升（團十郎）であった。昭和七年、三升は甲州で堀越氏系図を入手している。石原家系図、位牌などもあった。その後、十一代團十郎も数回、甲州を訪れ、西八代郡三珠町上野の、堀越館跡地に詣でている》

《五十九年（昭和）十一月六日、この地に「市川團十郎発祥の地」碑が建立された。県をあげての事業であり、地元紙の山梨日日新聞社、山梨放送も加わって大キャンペーンが展開された。高さ二メートル、幅九十センチ、奥行き八十センチの黒御影石で、碑の上部は斜めに切り上げ、市川家の家紋・三桵をデザインし、側面には鳥居清倍筆による初代團十郎の役者絵「竹抜き五郎」がレリーフされている。裏面には十代市川海老蔵による撰文が記されている》

市川團十郎の「竹抜き五郎」重文・鳥居清倍筆（下絵）について、東京国立博物館のホームページ解説は次のように述べる。

《初代市川團十郎に代表される江戸の荒事歌舞伎の豪快味

を表現するために、初期鳥居派の浮世絵師たちが常套手段としたのが、瓢箪足（筋肉を誇張するあまり、瓢箪のようにくびれた手足）、蚯蚓描（極端に抑揚をつけた描線）と呼ばれる描法であった。この図にもその典型が見られる。孟宗竹を渾身の力をこめて引き抜かんと足を踏んばる五郎の肉身および竹葉の一部に丹、竹・土坡・衣には黄の筆彩をほどこす、墨摺に丹を主とし、他に黄や緑など数色を筆彩色したこの種の浮世絵版画の様式を、丹絵と呼ぶ。元禄10年5月、中村座の「黒小袖 浅黄帷子 兵根元曾我」で、「かぶとに似たる竹ぬき五郎」を演じた、初代團十郎（『歌舞伎年代記』を描いたもの。ポーズや描線に類型化はまねがれず、彩色もやや粗雑であるが、あくまでも力強く、大らかな作風は、初期役者絵の代表作の名に恥じない。現在、世界にただこの一枚が伝存するのみの稀少な遺品である》

中村高志氏の「團十郎と山梨」を続ける。

《甲州と團十郎の縁を示すものは多い。まず家紋の三升は甲州桵、三升桵、から来ている。実際に甲州桵を三つ重ねると、あの『暫』などで知られる三升紋と全く同じ形になる。他に、歌舞伎狂言にみられる「三本太刀」、「つがもねえ」に



代表される甲州方言そして何よりも、團十郎の荒事芸は、甲州人独特の荒々しさ、俠客気質につながるのだ。

江戸、大阪、京都以外の地で初めて歌舞伎をやったのは五代團十郎でそれも甲府の亀屋座である。寛政三年(1791)四月のことだ。狂言は『景清破牢』と『曾我対面』助六『鳴神』。五代團十郎は合わせて四回もの甲府興行を果たしている。

直木賞作家の松井今朝子氏が今年4月、初代團十郎を主人公にした『江戸の夢びらき』を出版した。松井氏は2000年に十二代目團十郎から「次はうちの初代を小説にしませんか」と要望されており、そのことを十二代目の夫人・堀越希実子さんと対談した中で述べ(『オール読物』令和2年7月号)、初代が荒事の創始者としても有名な歌舞伎役者であるにもかかわらず、一度も小説の主人公にも映画にもなっていない。いつか自分で書いてみたいと思うようになって、十二代から言われた二十年後に書いたのだとも言い、同書で『遠い先祖は甲州の産で、武田信玄と縁があったとか』(『江戸の夢びらき』81頁)と、やはり甲州出身説を採っている。因みに『江戸の夢びらき』というタイトルの「夢」について『オール読物』で次のように述べている。

『夢』という言葉は、現代のようなドリーム、希望実現の感覚よりも、江戸時代にはナイトメア(悪夢)というニュアンスが強かったんです。「夢になれ、夢になれ」とか、「夢なら覚めてほしい」という日本語は、当時の感覚の名残ですね。だから「夢びらき」という言葉には、地震や火事、噴火といった自然災害、最終的には初代が舞台で殺されてしまったという世間にとっても、妻の恵にとっても悪夢のような出来事を乗り越え、息子である二代目が新しい時代を切り拓いていく意味をこめてつけました』

以上、これまで紹介した諸論を考察すると、初代市川團十郎の先祖は、甲州武田家に仕える武士・堀越十郎家宣という人物であるという説は確かだろうと思いたい。

ところが、劇評家の金沢康隆著『市川團十郎』(1962刊 青蛙房刊)で、次のように断定的に述べている。

『鳥亭馬場でも、伊原青々園でも、一応、市川家の先祖は、その家に伝わる伝説にしたがって甲州武田家の浪人ということになっている。しかし、この説は、例の系図作成者流の粉飾にすぎない、はなはだ不信用なものであるようだ』

また、以前に触れた「山梨歴史文学館」の「市川團十郎の祖は山梨ではない 甲斐の歴史誤伝」(2016年03月06日)というブログでは、

『……山梨県地名辞典……三珠町(平成17年市川三郷町に合併)及び市川地方に堀越の地名は見えない』『……武田家臣団……武田信玄家臣団及び一条信龍の家臣に堀越の姓を持つ者は見えない』とあり、続いて同ブログは文化五年(1808)『近世奇跡考・下』(山東京伝)、これは、近世初期の市井の風俗、人物の逸話、旧蹟の情報などを、古書画をもとに、また山東京伝自身がその場所を訪れたりして考証した随筆。京伝は、典拠とした資料を示しながら緻密な考証を行っているものであるが、ここで初代市川團十郎は堀越重蔵の子であると記しているが、堀越重蔵の出身地については触れていないと指摘し、『市川團十郎の祖は甲斐の三珠町の出自地の歴史なっていくのであろうか。史実とするには確かな史料を積み重ねることが肝要である。歴史は創作してはならない』と述べている。

さらに深く市川團十郎の祖は考察して見る必要があるだろう。次号以下で検討したい。

絹の話 (123)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

絹の化粧品利用

絹の化粧品利用の始まり

古くから絹石鹸や絹漉し豆腐など、絹のイメージを利用した商品は沢山ありましたが、蚕糸業法が廃止される平成10迄は繭を糸以外の物に作る事が禁じられていましたので、水面下では糸以外の利用法の研究は行なわれていました。実際に商品として販売されていたものは殆どありませんでした。

絹のゲルやパウダを作る為には、繭から直接作る事は出来ず、わざわざ糸にした物を利用して研究が進められていました。

水面下の研究とは、昭和の末期から養蚕をはじめ日本の絹産業の衰えが著しくなり、各県の蚕業試験場も養蚕農家が多く残っている群馬や福島県などを除き順次閉鎖されて行きました。

特に絹大国を支える為に設立された国立の東京農工大、群馬大、京都工芸繊維大は従来の養蚕、病理、製糸、物性などから新たな分野研究を始めていました。

同時期に各大学の農学部を中心にシルクや昆虫の機能、遺伝子組換え、野蚕等の研究が始まり、短期間に目覚ましい研究成果が次々に発表され、大手製薬会社も蚕を実験動物として飼育し始めました（今日のインターフェロンの製造に繋がる）。

シルクの機能性を化粧品に利用しようという動きは中小のアドベンチャー企業がいち早く取り組み始めました。

シルク化粧品効果は

【親和性】

シルクの成分は人の皮膚のアミノ酸組成に酷似していて化学合成の化粧品に比べて拒否反応は殆どなく、化粧品が浮いたり流れたりする事もなく、しっとり馴染みます。

【保湿性】

絹の結晶の60%は軟結晶で、その中に水分を保留し、溜め池的に保水量を調整する機能がありますので、肌の潤いを維持して10時間前後はしっとりとしています。

【抗菌性】

繭は蛹の生命維持カプセルで、外部から雑菌の侵入を防ぐ為の抗菌性に優れています。シルク化粧品も菌の繁殖による肌荒れを防ぎ、汗の匂いの発生も抑制し、肌を清潔に保ちます。

【防紫外線性】

絹に含まれるチロシンやフェニルアラニン、トリプトファンといったアミノ酸の働きで、有害な紫外線を反射し、一部吸収して害の少ない波長に変換し、肌を守ってくれます。但し100%カットはしません。紫外線をカットし過ぎると返って健康を害します。昆虫が人より遙かに長い進化の過程で獲得した絶妙なバランス機能です。

【皮膚下のコラーゲンの活性化】

人は年齢と共に皮膚下のコラーゲンが減少し肌の潤いをなくし、小じわが出来てきます。コラーゲンを食べても回復しません。ところが、絹は人の皮膚下のコラーゲンの減少を抑制し活性化させているようです。シルクが肌の新陳代謝を促進して新しい肌を作っているとも考えられますが解明されてはいません。何れにしても絹化粧品で顔の小じわが目立ちにくくなります。

【美白効果】

シルクの化粧品を肌に塗るばかりでなく、シルクの肌着などを着用していると、わずかながら色白になると言われています。絹自身は長い間には黄変しますが、顔のそばかすなどは長い間に少しくなるように、メラニンなどで黒ずんだ肌を絹の新陳代謝促進で皮膚を新しくしているからでしょう。

さらに活性酸素（体内に余剰になると老化などを推進する）を絹が中和する働きをするので、その時絹の抗酸化作用とあいまって、美白効果が見られると思われます

が、定かではありません。

昔から絹美人という言葉があります。

絹化粧品の作り方

絹化粧品は蚕糸業法が廃止されてから、色々発売される様になりましたので、繭からパウダやゲルを作り、それを利用して思うわれますが、絹のパウダやゲルの粒子の大きさによって、絹の機能性は微妙に変化します。そのあたりを各メーカーは公開していませんのでシルク化粧品であればどれも上記の効果があるとは限りません。

思わぬシルク化粧品の利用

シルクの化粧品は肌に塗るばかりでなく、時には髪の毛にヘアクリームの代わりにつけると、髪の毛がしっとりします。紫外線で髪の毛の傷みを防いでくれる様です。

また、肌のかゆい所に塗ると痒みが治まります。

現代お化粧考

一昔前より厚化粧の人が増えました。リンゴの様なホッペで透ける様な肌をした女性は蚕糸業法が廃止された頃から見受けられなくなりました。

濾過出来ない粒子の細かい化学物質の化粧品が水質を汚染しています。絹は自然に帰ります。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2020年12月25日

2020年 最後のひとり言

今年も色々な事がありました

その色々な事のおかげで

朝起きて朝日を見た時

健康で朝を迎えられ当たり前の1日を過ごせることへの感謝を

自分の為ではなく 人の為に仕事をしたいという心を

物事や人物を風評ではなく自分なりの見方を

人の温かさを 感じれるようになりました

花粉舞う開運坂を

容赦ない日差しが降り注ぐ開運坂を

雨が叩きつける開運坂を

頬を突き刺す風の開運坂を

そして

未知の見えないウイルスがある中を

開運坂を登り本田カイロプラクティックに

いらして下さった患者さん

来年も微力ながらも

全力で患者さんを支えられたらと思います

今年も1年 本当ありがとうございます

来年も笑いながら行きましょ

2021年1月6日

いつもの生活へ

お天道様が出ていないと

朝方の風の冷たさが身に沁みますね

毎年恒例になりましたが

本田カイロプラクティックにいらっしゃる患者さんの身体がいつもとは大分様子が変わっています

それは

まとまった休日を挟むため

普段とは違った生活習慣になるからです

起床時間や食事時間

座わっている時間

座っている場所や姿勢

入眠時間や睡眠時間

画面の见ている時間

水分補給の減少

身体を動かす時間

などなのです

それにより

肩こり

腰痛

片頭痛

背中の痛み

首の痛みや腕の痛み

脚のつり

目の痛み

どの症状が出やすくなります

今週は無理せず 3S をしっかり意識して

いつもの生活に

身体と心をゆつくりと慣らして行きましょう

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 38 江上浩二

人工知能A-Iというより子供の成長をみて

今や誰もが人工知能A-I (artificial intelligence) と言いつても何も疑わない。

実は殆どの人がそのプロセス、如何にA-Iの示している事が導き出されるか知らないし、専門家に説明されても分からないと思っている。

数学的専門用語を使って申し訳けないが、私自身も若いころ(47年も前になってしまった)に、数値解析や汎用コンピュータしかない時代に独自にやっていた。非線形関数のテラー展開、多変数解を得るために最小2乗法を適用し行列式で近似解を求める、その過程でデータから入れ替え行列、逆行列を生成、その初期値生成のために初期パラメータのランダム化にマルコフ法を適用したり、行列式をいっぺんに解かず(発散する場合がある)、のそりのそりと収束させた。

そういった行列式を解く過程がA-Iのpythonという

プログラムの中に組み込まれているという。

machine learning deep learning neuromorphic process
グーグルの猫の顔の話など、少しA-I関連の事に触れた方はキーワードとして重要な事は分かるが詳しく知ろうとしても先に進まない。

さて、人の子供、赤ちゃんがこの世に生まれ少なくて簡単な言葉が話せる2歳始めまでの事を詳しく観察できる機会を得て、所謂A-Iのプロセスを考察したい。

生まれたての赤ちゃんの視力は弱く、先ず音声が入り、脳で受容認知され、記憶として形成されていくであろう。その際に優先して受容される音声は母親の呼びかける言葉を始め、家族であることは間違いない。

だんだん視力が良くなり目を動かし周囲を興味深く観察します。それと共に先に受容認知していた音声と何か初めて視野で認知された映像が次に記憶されるであろう。それらが音声というラベルで、記憶される映像が紐付きされるであろう。後にそれら音声単独の記憶の発達、単語レベルの数の増大と言葉としての構造化(あえて文法とは言わない)の習得が進むであろう。

赤ちゃんの言葉の受容、学びは周囲の真似から始まる。それも簡単に言いやすい発声しやすい言葉以前のあー、うー、ふーとかである。次に同じ母音を2つ繰り返すあー

あー、うーうーである。更に異なる母音が組み合わさった発声の真似になる。このレベルで簡単な言葉だが結構な組み合わせができる。その先は容易に類推できるが3音の組み合わせだった言葉の真似である。

にこにこー猫のこと（飼っている猫の名前にこ）

わんわんー犬のこと

おかさな（お魚のこと、一部か|と|が入れ替わっている）

おとうさん、おかあさん（両親が所謂パパ、ママと言わせなかった）

次の段階で言葉の構造化、 $x \times y \times y$ （または $y \times y \times y$ ）の真似ができる。抽象化は未成熟なので、もの、名詞で表現出来る映像が伴うことが必須である。事例を二―三あげてみる、

わんわん おおきい （大きな犬）

（父親が家に居ない時）

おとうさん、しごと

おとうさん、かいもの

順次観察された言葉文章表現レベルまでのまとめ（2歳2―3か月頃まで）と周囲の道具デバイス（あえておもちゃとは言わない）にどのくらい興味を持って使いた

がるか、自分の意のままに使いこなすかについてまとめ（2歳2―3か月）をしたい。そのうちに子供TV番組の歌とダンスを覚えて、結構長い時間の歌詞やふりを真似している。これぞ、文盲の大人のレベル。下手に文字を覚えた大人はそれらの歌詞が空では覚えられない。

さらに、願望の表現と行動へ

親に身体を持ち上げて、高い高いをして欲しい
親がキッチンにしまつてある網かごを探しに行き、
見つけ網かごを帽子のように被りたがる

実はスマフォの操作（親の真似）が出来、Youtube
の見た映像の再生、ストップの印を覚え
それらが出来る

4×3 や 5×4 ピース程度の所謂ジグソーパズルで、
好きな絵合わせをしたがる

カンカン、見に行きたい（近くの電車が通る踏切が
カンカンと鳴るので）

こう見ると遥かにA-Iを超えていると言わざるを得ない。個体差・個人差（主に環境・親の接し方）はあるが、2歳を超えたこの2―3か月という短い時間に小さな脳の中で人らしく成長し、大人への第1歩を踏み出していると確信する。（続く）

漢詩研修 (五十二)

千代田岳精会 平井茂行

登高

杜工部

甫

風急天高猿嘯哀

渚清沙白鳥飛迴

無辺の落木蕭々として下り

不尽の長江滾々として来る

万里悲秋常作客

百年多病獨登台

艱難苦恨繁霜鬢

潦倒新停濁酒杯

【作者】 杜甫（七一二～七七〇）盛唐の詩人で李白と並び称せられ、中国詩史の上での偉大な詩人である。字は子美（しび）。少陵（しょうりょう）または杜陵と号す。洛陽に近い鞏県（きょうけん）の生まれ。七歳より詩を作る。各地を放浪し生活は窮乏を極め、安祿山の乱に賊軍に捕らわれる。律詩に巧みで名作が多い。湖南省潭州（たんしゅう）から岳州に向かう船の中で没す。年五十九歳。李白の詩仙に対して、杜甫は詩聖と呼ばれる。

【語釈】 ※登高…昔中国では旧暦9月9日重陽の節句に小高い山や丘に登って酒に菊の花びらを浮かべて飲む風習があった。

※無邊落木…あたり一面限らない木の枝や落葉。

※蕭蕭…ものさびしい 落葉するざわざわという音。

※滾滾…水のさかんに流れるさま。

※繁霜…霜のように髪の毛が白くなったこと。

※潦倒…老いぼれる おちぶれる。

※新停…最近やめた 禁酒したこと。

【通釈】 風ははげしく吹きわたり、天はいよいよ高く、猿の鳴き声が哀しげに聞こえてくる。見おろすと揚子江の渚は清く、砂浜は白く光って見える。その上を鳥が飛び回っている。果てしない木々はもの寂しい中にざわざわという音をたてて葉を落とし、尽きることがない揚子江の水はさかんに流れている。

『責任について』

中 屋 保 之

一般には箱根駅伝と呼ばれる「東京箱根間往復大学駅伝競走」が、今年も数々の感動を与えてくれた。例年一月二日と翌三日の二日間にわたり行われる関東地方の大学駅伝の競技会（地方大会）である。関東学生陸上競技連盟（以下「関東学連」という）が主催し、関東学連が定める内規によって運営されているそうである。創設以来学生主体を現在も守り、沿道の走路員スタッフとして学生が起用されている。所属大学の櫂を次の走者に無事渡してゆくという「責任」を負って彼らは走る。相当な重圧なはずだ。櫂を繋ぐという「責任」を果たせなかった学生たちは、陳謝はしても弁解はしない。その代わりに、次の目標に向かってゆくその姿で「責任」を全うしようするのである。

翻って、昨年から新型コロナウイルス禍対策や、元総理などを含めた政治家諸氏の言動はといえば、「責任」感の希薄なることこの上ない。デジタル大辞典によると「責任」とは、『一、立場上当然負わなければならない任務や義務。二、自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと。三、法律上の不利益または制裁を負わされること。特に、違法な行為をした者が法律上の制裁を受ける負担。』とある。

「今村均」という人物がいた。彼は、一九一五年、陸軍大学校二十七期を首席で卒業。恩賜の軍刀を賜ったというから、相当将来を嘱望された軍人であったであろう。同期生には本間雅晴（三番の成績 筆者註Ⅱマニラで戦犯として銃殺）や、東条英機（十一番の成績 筆者註Ⅱ東京裁判で絞首刑）がいた。今村は一九六八年（昭和四十三）まで戦後二十三年を生き、うち九年は戦犯として服役している。数多の部下を死なせた責任、戦犯裁判で部下たちを刑死させた責任、陸軍首脳の一人としての負け戦への責任を、生涯罪責の念として持ち続けたそうである。

今村の真骨頂は、戦後における身の処し方にあると言えるだろう。

今村自身の手による「幽囚回顧録」や幾つかの書に一貫して流れるのは、部下の将兵に対する庇護と占領下における現地住民へのリスクである。オランダによって流刑とされていたインドネシア独立運動の指導者、スカルノとハッタら政治犯を解放して資金や物資の援助、諮詢会の設立や現地民の官吏登用等独立を支援する一方で、今村は軍政指導者としてもその能力を発揮し、攻略した石油精製施設を復旧して石油価格をオランダ統治時代の半額としたり、オランダ軍から没収した金での学校建設や、日本軍兵士に対し略奪等の不法行為を厳禁として治安の維持に努めたりするなど現地住民の慰撫に努めた。また、オランダ統治下で禁じられていた独立歌『インドネシア・ラヤ』の歌唱を許している。

これらのことが、のちに戦勝国の今村に対する極刑要求を覆す原動力になった。ジャカルタで行われたオランダ軍事裁判では死刑が求刑されたが、判決は証拠不十分で無罪であった。ラバウルで行われたオーストラリア軍事裁判での禁錮十年の有罪判決で、東京の巣鴨拘置所へ収監されるべく同囚七百人とともに一旦は帰国の途についた今村だが、¹豪州軍事裁判で十年の禁固刑を受けている以上、マヌス島（筆者註²赤道近くの収容所）で部下と一緒に服役を³と懇願したり、夫人をGHQへ出向かせ、「何とか同島へ送って欲しい」との請願を三度に亘って行わせたという。その時の夫人の心境や如何に、である。亭主のピンチを顧みることもなく自由気ままな元総理夫人とは雲泥の差であろうか。

そこで、今村は部下たちと自給自足体制を整え、ついには⁴豪海軍の将校や下士官が、毎週土曜日に⁵野菜をもらいに来るようになったそうである。マヌス島服役から四年後、一九五三年（昭和二十八）同島刑務所の廃止により他の戦犯とともにようやく日本の地に帰り着くことが叶った。翌年十月に刑期満了となった後、東京世田谷豪徳寺の自宅に建てた三畳一間の小屋で起居し、戦没した部下の遺族への弔問や世話を続けたそうである。

百万言を弄した弁解の、なんと空虚なことか！ 今村大将の生涯を知るにつけそう思う。

故郷こきょうに遊あそんで俳聖はいせいを思おもう

横山精真

青山せいざん碧海へきかい 陽光ようこう遍あまねし

夕映せきえいの清波せい刻はとして粧よそおいを変へんず

惜おしむべし芭蕉ばしやう 松島まつしまを詠えいじ

鵜渡うど越弓ごえゆみ張はりに遊あそばざるを

遊故郷思俳聖

青山碧海遍陽光 夕映清波刻變粧
可惜芭蕉詠松島 不遊鵜渡越弓張

(語釈) ○俳聖：芭蕉。 ○夕映：夕日に照り映える。

(通釈) 緑しげれる山、青い海に太陽の光が一杯だ。

夕日に照り映える九十九島のさざ波は刻々として色彩を変化させてゆく。

思うに、芭蕉は東北を歩いて名句を詠んだが、山陽から西には到っていない。この九州吾がふる里佐世保に足を運んだら、何と詠ったであろうか！松島どころではないと思っている。

※「美しき天然」は西海国立公園・佐世保の歌である。親がそう言っていたことも微かに思いだす。そして、このメロディは佐世保の海軍軍楽隊長が作曲したものと、だけど小さい頃、このメロディはチンドン屋かサーカスの歌だった。昔の子供達はほとんどがそう思っていることだろう。

大きくなって佐世保に帰省するようになると、ふる里の思い入れが一入となり、この歌詞が侵されることのない自然を思う中に何とも言えない郷愁を引き起こしてくれる。

景色を眺めながら、ふる里の自然を誇りに思い、今こそこの光景が最も大切なものと思えてならない。

空にさえずる鳥の声 峯より落つる滝の音、

大波小波とうとうと 響絶えせぬ海の音、

うす墨ひける四方の山 くれない匂う横がすみ、

海辺はるかにうち続く 青松白砂の美しさ。

見よや人々たぐいなき 此の天然のうつしえを。

筆も及ばずかきたもう 神の力のと尊しや。

花辨酒 はなびらざけ

今泉由利

東風習々芳時に及び とうふうしゅうしゅうほうじ およ

煦々韶光花下の帷 くくしやうこう か とばり

萬朶千技紅瀾漫 まんしせんしこうらんまん

英を泛べ寂々と酒中詩 はな うか せきせき しゅちゅうのうた

花辨酒

東風習習及芳時

煦煦韶光花下帷

萬朶千技紅瀾漫

泛英寂寂酒中詩

（語釈）

習習―ならわし

煦煦―あたたかな
帷―宴のとき

寂寂―おもむきのある

（詩意）

野を山を覆い尽くして咲き満つ桜　散りくる花がらを杯に受けて…一杯また一杯また一杯

芭蕉と子規5

夏目勝弘

松島見物した子規は（松島に眼のくたびれし涼みかな）また（涼しさにうその名所も見て行きぬ）と

○のぞく目に三千年の風すゞし 子規
と詠み岩切停車場に汽車を待つ。

○蓮の花さくやさびしき停車場 子規
仙台にて泊り、槐園子を南山閣に訪ふ。

○夕立の見く山を下りけり 子規
○行水をする小池や蓮の花 子規

○涼しさのはてより出たり海の月 子規
槐園子にすめられ一泊。

○野も山もぬれて涼しき夜明かな 子規
槐園も短歌で（ひろせ川朝きりわけたつ浪の音よりあくるしのめの空と

旅宿に帰り、槐園子に（涼しさや君があたりを去りかぬる）と

○土用干や裸になりて旅ころも 子規
また南山閣で（旅衣ひとりぬれつゝ夕立の雲ふみわけて君をとふかな）と二首詠む

南山閣を辞して出羽に向う
○涼しさを君二人にもどし置く 子規

槐園子より饒別として（草枕旅寝の夢や迷ふらん松しまの月ささかたの雨）の一首を

広瀬川沿いに山形へ、山深く入り作並温泉に泊る。
○山奇なり夕立雲の立ちめぐる 子規

○夏山を廊下つたひの温泉かな 子規
九十九折の谷道を行く、十許りの女童に会う

○雲にぬれて関山越せば袖涼し 子規
○撫し子やものなつかしき昔ぶり

隧道を抜ければ山形
○隧道のはるかに人の影すゞし 子規

○涼しさや羽前をのぞく山の穴 子規

出口の茶屋に蠅むらがり飛ぶ

○蠅の舞ふ中に酒のむ車力かな 子規
山を稍下りし所に家つあり

○午飯の腹を風吹くひるねかな 子規
幾曲り曲り松杉の中に入る

○涼しさを碎けてちる瀧の玉 子規
○瀧壺や風ふるひこむ散り松葉 子規

○ほろく谷にこぼるいちこかな 子規
○山を出てはじめて高し雲の峰 子規

○山里や秋を隣に妻をこぐ 子規
関山の所で左に行けば山寺に行けるが、右に東根を過ぎ楯岡に泊る

○夕雲にちらりと涼しつ星 子規
前日の疲れ直らず

○何やらの花さきにけり瓜の皮 子規
○旅僧のかざりついたり眞桑かな 子規

三里の道を半日かけ大石田へ正午に着く。芭蕉は立石寺の僧房に泊り、習日大石田に高野一采を訪れ榮・曾良・川水と歌仙を巻く。

発句は芭蕉の（さみだれをあつめて涼し最上川）のちに「あつめて早しと改めている。

大石田を立つ予定を、新庄へそして最上川を下り羽黒山へ南谷の別院に泊る。
○ありがたや雪をかをらす南谷 芭蕉

出羽三山の霊山回峰へ、羽黒山そして月山へ
○すずしさやほの三日月の羽黒山 芭蕉

○雲の峰幾つぐずれ月山の山 芭蕉
湯殿山は行者の修験秘密の道場

○語られぬ湯殿にぬらす袂かな 芭蕉
三山の巡拝を終え疲れはて翌日は息入れる。

○温海山や吹浦かけて夕涼 芭蕉
あつて酒田で二日を過ごす。

○暑き日を海に入れたり最上川 芭蕉
初案では「涼しさや海に入れたる最上川」を本文では改案されている。芭蕉の「不易流行」この二つは「風雅の誠」によって共存すると。

「氷魚」のことから (241) 岡本八千代

もうすぐ新しい年になる。

西暦2021年。平成33年。令和3年。昭和96年。になろうとしている。老いの私、ますます以て生きていく不思議……。

今回は、茂吉の昭和九年の時の新年のことから書いてみた。(北杜夫の茂吉彷彿参考)

○昭和九年一月一日。

「今日ハ元旦ダガ、風邪ガ未ダ全クハ癒エズ。ヨツテ臥床シツ、アリ。午ゴロヨリヤウヤク起キテ餅ヲ少シク食ス。ソレヨリヒトリ寂シク机ニ向ヒテ人麿ノ歌ヲ評釈シタ。疲勞シテ寝タリ。本院ニモ行カズ。籠居。

○一月二日。

「サビシキ新年ナリ。誰ニモアハズ、職員ダケニ祝詞ヲノベルノヲ受ケタリ。本院ニモ行カズ、母モ西洋モ来ズ。夜モ汗出ツ」

○一月三日。

「午ニ近ク山口君来リタルヲ以テ外出シ、銀座ニテ鰻ヲ食ヒ、ソレヨリ築地小劇場ヲ見ル。三ツ見タリ。ソレヨリおでん食ヒ、少シク酒ノミタルニ胸ノアタリガ苦シクナリ、冷汗ガイデテ倒レンバカリナリ。ソレヨリヤウヤク気ヲシヅメテ外ニ出デ、銀座ヲ歩キ、宗吉、昌子ニ玩具等ヲ買ヒ帰ヘル。

もともと茂吉は、自律神経過敏症といわれているので、激

しいストレスにおそわれていたらしい。新年でも、家族の和気あいあいというものがなく、寂しい新年の様子。

この頃の茂吉は、アララギに対して、一月号と二月号に歌を休み、一月号から始まった「長塚節歌集合評」にも参加していない。全員の歌を選ぶことだけは怠らぬように努力していた。またアララギ会員と面会日設け、作家指導することになっていたが、それもついにやらなかった。しかし、人麿については、「大ニ勉強シテ」調べ、草していた。

茂吉は、昭和八年の十一月頃から、自から自分のことを精神的・負傷と言っていたらしい。茂吉の息子の北杜夫も、幼い時から、孤独の感情があつて「父のように私も分裂・氣質を多く持っていたことにながつている」とも言っている。

「兄の茂太も幼稚園児の時、登校拒否症があつたと言われている。父は病院や歌の勉強に忙しく、母も自分の用事にかまけていて、誰も幼稚園へ行けと命じなかつた」とー。

杜夫は、昭和九年の四月から小学校に入つて、成績もよかったのに、意味もなく時々学校をさぼつたことがあつたらしい。茂吉の日記に出ていたと。また、杜夫は学年が進んでから、「登校するふりをして玄関を出、そつと裏庭の大いちょうの木かげにひそんで、学校が終るまで佇んでいたこともある」とー。そして、「今、思うとそれは漠とした孤独の感情である。これは私が父のように分裂氣質を多く持っていたことにつながるかも知れない」と言っている。

茂吉のいう、精神的・負傷とは個人の詩のような美しい心ではないか？と私は思う。

編集室だより【二〇二〇年十二月】

今 泉 由 利

○コロナ菌蔓延のNYから、日本の年末の仕事のため、NY住いの玉由と由野と、日本へやってきた。二週間の隔離あり、私の家へは来ない。「人に会うのが仕事だから、コロナ菌を運ぶ役目になってはいけない」と。

○考えられないことが起り、次々考えられないことは重なり：自分の時代は終った感が深い。確なるうえは、自身の感染しないことを最優先して、子供達の労りに浸っている。

○二ヶ月に一度の歯のメンテナンスにゆく。どの隅っこにも、一つぶの細菌もないだろう雰囲気。ヨードで消毒された口腔は、たちまち異常なし。とにかく、どこも悪くないように、自分で自分を守っている。

○仕事も、習い事も、ズームで！今東京に来ている玉由と由野と私も、ズーム。

様子が良くわかるから、このことは、これで良いけれど、なんだか情ないことになってしまったものだ。

○チーズ三種類とはちみつのピザ、野菜と温泉たまご入りサラダを、自転車に乗った子が運んできた。由野がウーバーに頼んだらしい。皆に、仕事が沢山あるように、

せつせと食べるようにしよう：と思いたった。

○ラジオ体操、テレビ体操、しっかり参加する。カーテンを締めて、家中の一番奥まった所で、声を限りに詩吟の練習をしている。少しくらい外に聞こえてしまっても悪くはないような時間帯に。ひとりだけのことだから、羞恥心もなし。漢詩と楽しく過ごせて、胸いっぱい満たされる。家に閉じ籠ることを充分に楽しんでいる。

○玉由と由野の南青山の仮住いを、コロナ菌撃退のつもりスタイルで訪ねた。

少しの間、過すための家の合理的に清潔に出来ていることに感心してしまう。外国で生れ育っていた子供達のが、日本留学と、中学にあたる三年間を日本で過ごしたのが、神宮外苑だった。

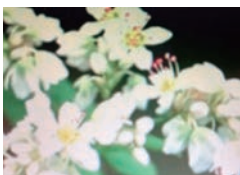
体操をしていた由野が毎朝、今の「オリンピック・スタジアム」を一周ジョギングをしてから学校へ行った。その頃の絵画館には、子供達の尊祖父が、イギリスへ船旅をして、連れ帰った「皇太子白馬」を展示していたから良く会いにゆけた。

今度また「白馬」に逢ひに行く。展示がかわり、存在がわからなくなっていた。

こんな機会に、沢山のことを思い出し、話し合い、神宮外苑辺りの清清しさをあじわい、ありがたい日となった。

野菜・果物・まんだら (36) 蕎麦

学名 *Fagopyrum esculentum*



- タデ科 ソバ属 一年草。双子葉類。
- アジア北西部原産。
- 日本への伝来は、奈良時代以前、中国から朝鮮半島を経て日本へ。
- 高知県の遺跡から、蕎麦の実の花粉が発見され、9000年以上前のものと判明。
- この時期、蕎麦の栽培がはじまった。多家受粉と、別の株の花粉がつかないと、実を結ばない。
- 実は、三角稜型で、播種から75日で収穫出来る。
- 蕎麦は、ビタミンBを含み、脚気などの予防効果。含まれるルチンは、毛細血管強化、高血圧予防、酸化防止、生理活性を有する。
- 養老7年と承和6年、蕎麦栽培の奨励を命じた太政官符が現された。
- 鎌倉時代に書かれた「古今著聞集」に平安時代の中期の僧、歌人である道命(藤原道長の甥)が、住民より蕎麦料理を振舞われたこと、南北朝時代の「拾芥抄」では蕎麦と猪、羊の合食を禁じたり。
- 16世紀末、17世紀初頭には「蕎麦切り」と庶民への普及。
- 寛永20年に書かれた料理書「料理物語」には、蕎麦切りの製法が載っている。
- 蕎麦を茹でた後の蕎麦湯は、健康に欠かせない栄養価を多く、バランス良くふくまれている、高血圧、肝臓の障害等により。
- 一茶:「草のとや初そばがきをねだる客」「信濃では月と仏とおらが蕎麦」
- 芭蕉:「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな」「三日月に地はおぼろなり蕎麦の花」
- 蕪村:「残月やよしのの里のそばの花」「しんそばや根来の椀に盛来(もりきたる)」

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。